日本絵類考

十

飯島盧心作

10
75
11

日本繪類考卷十

目録

英家　南蘋風
板谷家　光琳流
円山流　四條流
望月流　狩家
岸家　文晁流
浮世絵　畫名ノ様ニテ画法ノ生ル
絵巻物　畫法
画國　畫會

内閣文庫

鑑重會　書重展覩會
重姙　書重帖
收重法　裱裝
重裱具　蔭款
重虛言　重唐
經所　重佛師
經雜坊　經解
ものさし重　下重
重本　粉本
重頭　重才
六法　六要六長
十二忌　三品
三病

日本絵類考巻十

英家

英家ハ一堂をなして祖となる一堂ハ大坂の人多賀氏後ハ英氏を称し幼名精之丞法名門又助と進と以ハ年十五江戸ハ出て狩野安信の門ハ入て画法を学ひ師名の一字を授ケ是安雅と称し牛麿と号ハ年二十四自家義雅と号す安信其の年歳なと弱ハして雅と称し倫とかしかハ

といりて師弟ハ約を結つ一堂筆力自在新意百出師授の規格ハ従て遂ハ其後町ハ下居し名

を沼とす 信濃にいる 湖沼にすむ一魚を沼て 業と
なす 文祿十一年 信濃国にて 竹葉を風一幕府の
忌諱に觸れ罪せられて 三宅島に流される 島中に
あるて 魚を 沼を北意義にそなす 寛永六年 赦に遇
い江戸に帰る まもなく 魚をもって 業とした 其の魚大に
行なる ちなみに一蝶風と いう 享保九年 四月没す
年七十三 子孫葉と 嗣く 其の門流に 佐脇嵩之 高
嵩谷 同嵩溪あり 皆名を 称する

英泉畧系

一蝶 一蝶 一蝶 一蝶 一川 一洲

一笑 一靖 門人 一蜂 一蜂

南蘋風

南蘋風の祖は熊斐なり熊斐は肥前長崎の人にして熊代氏名は斐字は淇瞻備州と号す俗称長三郎後に甚五右衛門初め画を渡辺秀頂に学び享保年間清人沈南蘋徳川氏に招聘に応じ長崎に来る熊斐時に年十九官許を得て沈南蘋に師事し画法を研究し終に其奥を極む安永元年十二月没す年八十技業画人傳熊斐の条に委しく其名一時に震い画を需むる者夥しく来り学ぶ者五千を数へたりと称する其盛なる変

想ふに南蘋風の畫法を主張するに出でしものなり
て始めて門人中著名なるは諸葛監家業名建
涼岱の徒なりて末流亦其後明董九如の輩ありて
皆名手と稱せらる

南蘋畫傳流畧系

熊斐　熊斐　熊斐明　江越鋪浦　釈淨光
志村斐瞻　荒木君瞻　松林雅瞻　建涼岱
揮取奥表
文晁重渓ハ山崎氏の説を載せて曰く我邦の畫
南蘋沈氏の渡来をしるして別ハ一流と為す田功

山ノ長崎実録ハ按ずるに享保十六年辛亥十二月
二日三十七番船にて畫工沈南蘋と連れ渡る日
十八年九月十八日帰唐せりハ張姓ならび沈
来たりしハ勅を奉ず唐土新船来の書ハ其の名
を載せるなり張浦山の畫徵録も乾隆四年
ハ城を書ずれハ日付なく張譯なるも為ハ載
せず只沈德潛集中所書ハ南蘋の古詩あ
りて云く我家南蘋扇面生入奇妙花潛動植通幽
靈磅礴解衣毎騰趙胸中有主旁無人筆欲到處神
光到斯須擲筆図已完自写其天乳洞法滿室觀者

動顏色謂是人工效天造声名盈區夏流播海島中
日本之國東後東君長遣使書帶通船舟破波如行
空役鉢授槃礼數隆服着素枝之枝挂紅日手寫中
華以外兒離亮劫之弄風三年頓作還鄉長寓王行
如騎白鳳敏孫文奇推滿盤开服紡紜辯而送歸途
屢遇顛連人急人患孤如抱痛黃金散盡何須素法
貫之裝仍欲空妻拏相見吾欲然依白席門寺荒莉
南蘋蔚歲月深作恵不管霜毛侵前年賜我九狮之
図柏鹿奉寫言善頃還善箴敏生佳習耽謳吟与君
老年硫々日一心鞠君懷抱常情々安得刺船從君

至海上看君潑墨絃海棚於更聽成連琴

板谷家

板谷家ハ廣尚を祖とす廣尚初め廣度と称せしも後蘿斎と号す往古廣寺の門人にして画を以て青山御所に仕へ後徳川家の絵師となる其の子廣長画法を伝へ号を称し後上蘿斎と称す画人伝ふ廣長又の業を伝へ画を善くすこと久し後子孫廣隆長利あり一代毎に桂舟と号す桂舟と名を異にすること例なし

板谷家畧系

廣長 文化年間　廣隆 文政年間　長利 天保

廣書 寛政九年没

光琳流

光琳流ハ尾形光琳を祖とす光琳ハ京師ハ人名ハ方祝ま通称いい麻布飯倉伊勢き堂長江軒等の号あり俗称了金左藤十郎ハ特所家の画法を学び後俵屋宗達を慕ひ又深く本阿弥光悦の風を慕ふ人物花井山水共ふ俗物なり中ふ墨汁ふ金銀泥を交えて画きたるものあり之ハ光悦の遺法なりとて享保元年四月没す年五十六後年伯井松一深く光琳の画法を志たり光琳百図あり光琳印譜を著す画集要

墨小庵形支揪石方祝又寂明年安人初學常信後
師仙年又創一格余嘗親芙蓉峰圓以濃墨作水除
之岩用乳金滚混墨汁山頭塗白墨山腰塗石青用
石緑作松樹葉然可親如使他人作此則俗惡令親
者吞唾也弄乾山亦祐思ところ

支揪流情流略系

庵形支揪一方淑直腸一（隔也師方）酒井抱一一萬蒲

門人
紹真鷺一

門人
鈴木蚫潭

門人
田中抱二
鈴木其一
池田孤村

円山派

円山派ハ袁挙を祖とせり袁挙ハ初石田雲一嘯仙嶺と称し後袁挙と改め仲均僊南鵬水漢夫と共に活称を水丹波の人なりて京師に住せ石田巡行の命を受け西法を学び最妙を得一人物花卉鳥獣虫魚を画き一機軸を出せり其の石海内に振へり門人多し南財京摂間の画工大抵袁挙流風に倣ふものなり世この風を指して円山風と称す應挙の画右なるものハ遊景図和歌図鶴図七福七福図等なり寛政七年七月十七日

没る年六十三玉章要略ふ北汗先生曰自應安至
宝暦年間諸家作花木盆栽者不少然臻其佳境者
殆希是其失在學傳未撰本矣近世應羣能動植爲
其形細密精巧逼真然動爲形似所縛
不能振脫力是以意骨亂流弱者惜矣と仍て應羣
門人の秀傑は長沢芦雪駒井源琦山崎鶴嶺海辺
南岳森徹山西村楠亭山口素絢吉村孝敬奥文鳴
山脇延礼の十人なりて世こゝを應羣社十哲と称
す

円山流傳流畧系

- 円山應羣
  - 應挙
    - 木下應受（應羣養子）
      - 長澤芦雪 ― 芦洲 ― 芦鳳
      - 駒井源琦
      - 山崎鶴嶺
      - 渡辺南岳 ― 南嶺
      - 西村楠亭
      - 森徹山 ― 一鳳 ― 二鳳
      - 吉村孝敬 ― 了齋
  - 應震 ― 應立 ― 應誠
    - 中島素章（門人） ― 中島有章（門人）
    - 大西雪溪（門人）
    - 大西精年（門人）

山口素行―素安
奥文鳴
月堂―谷口月意（門人）
八田吉秀―川口月嶺（門）
山服短礼―世（門）絶叢意

四條流

四條流ハ松村月溪ヲ祖トスル月溪ハ俗称
赤右衛門京師の人（一説に名ハ春吉伯宅先伯又
右白と号す）壮て摂州吳服の里ニ隱るゝ又
吳春と号す初め西と大西孫右ニ學ひ其興謝
蕪村ニ能きて學ヒ蕪村没して後円山應挙と志
たし蕪逝の後ち京ニ住ス蕪村應挙
の二流を書中ニ入る別ニ一機軸を出すこと是
を四條風といふ文化八年七月十七日没す年七
十門人多し技素東人傳ふ四素風といふこと

其春を法とせんと欲するの風を重くし
て一派を立て庶幾とも四條派といふ其の家を
系統とし一派を南畝京師の重立に二流あ
り一は春村大雅蕭白の流にして一は庶幾月
渓の流なり二流互に相交りて庶幾月
渓の徒は皆四條通を住居として春村大雅
流の徒は皆四條流といふ其の家は祇園にて
云へるなりと

四條流傳流畧系

- 松村月渓 ― 岡本豊彦
  - 松村景文 ― 岡本常彦
    - 松村玉文
    - 横山清暉
    - 八木奇峰
    - 夫野夜潮
    - 吉田南渓
    - 西山芳園
    - 森寒斎
    - 富田光影
    - 紫田義董 ― 前川五嶺
      - 山脇廣城
      - 長山孔寅
      - 小田南畝
      - 三島上観
      - 別所東渓
      - 野村玉渓
      - 小栗伯圭 ― 義成
      - 塩川文麟
    - 百々廣年
    - 岡本俊彦 ― 岡本豊彦
      - 亮彦
      - 由中日華
      - 吉市金城
      - 堀江雪江

漆阡華堂
竹村文賦
江森金一
上松嘉淺
小田海僊

森　魏山
佐久間草偃
小原景山

服部元載
柴田義峰
小栗豊水
鈴木文寅
吉湯文湯
吉田春山
汴村宗順
山田龍洲
上代英秀
佐藤梅蔭

福澤駒嶺
羽倉可亭
田中馬溪
柴田是眞

望月流

望月流ハ玉蟾を祖とし玉蟾ハ石ハ玄望
月氏佐孫与五郎大坂の人初め土佐光成と稱き
惠法を学び後雪溪を師とし特所元信と慕ひ一
家を為し池大雅小文ハ南宗の惠法を創
始せり宝暦五年八月没す逸世書話ハ玉蟾名玄
東師人少好絵事学于土佐光成々奇之使学于
山口雪溪後与池大雅相約創為漢惠祖述唐白居
易摘諸家精英竟為一家為人飄逸而温雅有文学
自作粉本不拘於格套太有風趣延享十年六十四

沒遠人亜夫ニ玉壺京師の人其亜風格雲石流
と幸〻に後池大雅柳玉奎の輩と濱亜を工夫し
唐宋元明諸家の精華を摘取りて雅致最高し

望月流墨系

望月玉壺 ― 口誠斎 ― 日玉仙 ― 日玉川
　　 ― 大西酔月

玉泉

原家

原家は在中を祖とす在中は京師の人名
は致遠字は子重卧遊と号す明人の亜法を慕ひ
一機軸を出す山水花鳥とす頗る古人を長
とす晩年有職亜を巧まず天保八年十一月没す
年八十八子孫亜法を伝ふ

原家墨系

在中 在正 在明 在照 在親

岸家

岸家ハ岸駒ヲ祖トシテ岸駒ハ加州金澤の人姓ハ佐伯氏ハ岸名ハ駒字ハ賁然華陽向切鎮有親堂花形鎮鳩巣樓等の号ヲ初め有栖川宮ヲ経て近衛ヲ雅楽助ヲ経て後従五位下越前守ヲ一大手ヲ為る画法沈南蘋ヲ出て筆法精密能晩年宋倉の望ヲ棲居て天保九年十二月没年九十ヲ経て筆ヲ擱く

岸家畧系

岸駒　岸岱　岸良　遠山　竹室　岸派　岸規　九岳

文晁流

文晁流ハ若文晁をそなへ祖とせし文晁ハ江戸の人若氏若ハ文晁まハ文晁字山樓亜學名健斐亜二筆の名あり文五郎初め加藤文蓁北山喜叢等と称き亜法と世に張家元の亜法と著し雪舟探遠の筆法を模倣し終ふ一機軸を出し輝出以来の一大手を新たにする人物若舟島弥吉うまゆ善く山水器物をなす天保十二年十二月歿す年七十八其子文一文二後を継ぐ門人ハ華山霞崖南湖芙蓉竹石金陵武清玄翁雲室文雅閑林の徒ハ

て皆一時の名を彫て玉象要器ふ石文鼎鼎後出
入宋元諸家山水不事規倣自率胸臆揮灑縱横雲
煙泛動之態自然現業端雅潤秀逸自出機軸与池
尸祝元格者異矣彼豪放豪麗青緑山水結構堅密
設色古雅殆与明人爭席人物花鳥又有一種風致
及晩年枝益超邁之致

浮世絵

浮世絵ハ浮世ハ南世ハ南世ハ南世ハ南世ハ南世ハ
さまざまなる絵を以て其の祖ハ懐信堂なり也
人出絵又ハ浮世絵の祖なりとハ話て浮世絵の祖
なる余青懐信堂を作りて云ふと雖ども曰く
懐信堂ハ浮世絵歴史中の一名家にして其の関
係する所極めて大なりと雖ども姓氏伝称年代乃ち
幸運等詳ならざる諸書載する所を考へるに浮
世絵彫刻ハ寛永正徳ころの人伝称岡浮師文
子安慶俊神頭訪所ふ吾信を其の作を見るに懐

月堂とのゝあらそひて古画備考ニハ懐月堂度会日本新画懐月堂書流度会図之縁とそこ〳〵古〳〵婦人の立物描書物ゝ面貌肥俗なりと花街漫録ニハ懐月堂ハ元和年中浅草ニ住居し人ゝ云て市谷内藤地蔵の絵を画宣文の頃吉原若衆奥州と云ふ娼女の画図なを蔵新日本新画懐月堂安度図之とあるとあり宝永正徳ころの人と云ふ亦ハ元和寛文の頃と云ふ又元禄ゝなを女しるゝとあり諸家考ふる所の年代其の相異なること此の如し〳〵て数

考ハ其の伝称を挙けて図作源七と云ふこと憑拠なく〳〵て云ふ所あるを画〳〵れと其の憑拠分詳ならざる

懐月堂住居の地を類考ニハ浅草仲仮町漫録ニハ浅草仲ゝあるハ一説ニハ天保和永の頃浅草生まれて住る所額助と云ふる移転所ありて〳〵が余ハ数世相伝の画工懐月堂の後ゝとて人ゝ語を〳〵と又一説ニハ浅草仲町ニハ古くゝ住ると云ふのあり浅ニハ住る廃墟たるとして芳町ニハ移住〳〵住るの伝説ゝと考ひ〳〵ゝ

を来いをく諸いのものとあり此の流派の筆者
なりしてその人自ら流をたてる支あるを以て
い懐月堂の後なりんと
書賈小林氏者て浮世絵展覧會を催せしの来人
フエノロサ氏乃あり其の出品目録と称る中ふ
懐月堂のものと称して曰く懐月堂の因筆ハ二
様の石ありて或い赤図のものく度摩と書く或い
安知と書きて度摩安知ハ異して日人なりや否
や明らかなりしも若し然らばものを安知の
看者ハ度摩ふ比して稍優あるものと懐月堂内

筆の異石ハ二様ふ止まらず三様も四様も所る
なりて之りて度摩安知ハ二人の石みにて一人
西石ふ為いまるものく古画備考ふ懐月堂未流
度摩なりしあるものく既ふ懐月堂ありて
其の末流と云人を因りて別人みして後孫ら或
い門人なりて其の看者の異なりしまと宜ふ
らもや又曰く吉川長春奥村政信又鳥居流の筆
者ふ於ける進歩ハ即く懐月堂なりて生まれしふ
て懐月堂ハ春西の美術ふ頗る影響なる日本画
家の一人なりしと長春政信なりしの筆勢懐月堂と

[illegible]
して頗る高を得たるものとなりて全き[illegible]
風流世に見る所なり
余懐月堂の著編を閲するに二十有餘幅
の[illegible]きに面するが真の中山水花鳥なるに画ける
い一幅もなく美人画にて其の美人
は皆一人として男子なるべきを女児なるべきを
たるとなるなり若し皆恥を知りて面貌
柔和の中に自ら威あるは南蛮の北女なるべし安女
の姿なるを衣裳の格好なるは蛮の流れなるべし

美なるべきを古極日一の筆法にて落款は各
こなるとも一見恰一人の手なるを知り
如し去りて其の落款は日本武田懐月堂安知
まるは懐月堂安度懐月堂安度又は懐月堂
と署し懐月堂末流度繁と署するもあるべし何れ
も師なるべし門人なるべし一世なるべし二世なるべ
るべし詳なるべし[illegible]の筆法世に秘[illegible]
ら其事跡の詳なるべきは実に史家の迷惑なり
る所なり
懐月堂数世皆一に美人画のみを画きて著他と

画うさるゝい著一其の故なりとふ云ふて一按
ふ深世画師懐月堂は自ら日本武画懐月堂と款
して誘導の意を表せるとゝへども其の実は日本
絵の真面目は即ち此の画法なりして自信とする
ものなりん今其の画法筆法墨色を細視するに
ふ土佐ふあるゝ狩野ふ一流獨立して他
を顧みざるもの如し如の土佐と云ふ狩野と
いひ自日本画と称せゝども其の実は唐宋
元明の画法ふ拠らるゝなり古来人物を画
くふ十法あり雖画図解遊遊意波油雲先生暗過

正鉢顕霞南蘋こゝとなり土佐狩野の人物画は皆
この十法の外ふ出でざるなり然るふ懐月堂の
美人画ふあらざるこゝ著の法ふ拠らずして一
格と出ずゝ其の彩色の法も亦古人ふ拠らずして
年〳〵合世絵具を用ゐ殊ふ紅を解毒の色と
視ゐるを以て此を以て自ら日本画の真面目と称せ
亦故あり然るに其の美人画のみを畫きし
ゐ已ら自称する日本画の真面目を示せるゆゑ凡
俗美人画ふ如くものあらざるを以て盛ふ画き
出ずるなりん懐月堂の見識寄なりやや

凡画工たるものの一ふしとしての研究あると画き生計をもい家と称し山水家にして花鳥を画くことを得さるうちにあるて花鳥家ふして人物を画くことを得さるうちにあるて高くもい仏神仙ふして四條流と画き四條流ふして漢画と画くものあるて之其の志を所望ふさるふ仏ふて生計の為止むを得さるふ出つるなり懐月堂ふ勉ふて世に之の研究ふる所の美人画のみを画き卓然獨立して金銀の為仏を画くさるしあるて之を蓋し其意世に高かるしふ又い別ふ生業あるしふ身常ふ画ふして如何をれ此の如くなるうちを得んや甚敷ふ

凡仏画ふ三類の区別あるて一ハ高く掲けて見るものこれなるて即神仏奉仏の顔面あるひハ格天井顔面行燈画の類なるて二ハ下ふあるて見おろすものこれなるて即画巻あるひハ画帖の類なり三ハ正面ふて正視するもの二ふなり即掛物あるひハ衝立の類なるて懐月堂の画法ハ人物肥満ふして衣紋の動く筆勢なるて始めふ去りて其の位画たる皆紙中一ぱいふ画きなして上下をあけざ

るハこと三ツ〳〵并一類顔面の画法みゝて画
帖機物等の画法ハ[illegible]こと明ラかなること
ハ[illegible]て燕考[illegible]ふ懐月堂ハ蓋し狩馬顔と画
きたる画工ハ[illegible]て世〳〵浪華ハ行〳〵親吉堂乃ち
駒形堂春信の絵ハ[illegible]を[illegible]器業[illegible]
て〳〵ハ[illegible]て安度安度度度度度度度其の他本流某
[illegible]ハ必一代の絵ハ[illegible]ハ懐月堂
〳〵絵〳〵世〳〵相伝ぎたる絵ハ[illegible]其の年
代ハ詳ならされ[illegible]蓋し寛長元和以前ハ刑氏
の流ハ[illegible]ハ其の以前[illegible]ハ元

禄ハ後元文延享の頃ハ[illegible]相伝ハ行ハれたるも
のなるべし[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ浪華ハ狩馬画
[illegible]ハ[illegible]時ハ画[illegible]朝板の絵馬画と[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ懐月堂ハ[illegible]ハこの絵[illegible]
[illegible]
奥村政信鳥居清信の二人ハ共ハ懐月堂の門人
なり〳〵て奥村政信ハ落款ハ日本絵師芳月堂又
ハ日本戦画芳月堂なりあり[illegible]この芳月堂の手ハ
蓋し懐月堂にて[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
〳〵て其の美人画の骨相筆意ハ皆懐月堂にて得

素晴らしく如し　又島津清信の画法は固く懐
月堂を学んで明らかに真の門人たるを知る
るがごとく　かの島津の識場者板画に如きは即
懐月堂の本色にして　全く顔面画の法を得
たるものと謂つべし　世に島津派と称せらるるもの
即ち是懐月堂流なり
世人若し又浮世画の初祖となすは誤
なり　又浮世の画は純粋の土佐絵にして浮世絵
よりも古き筆なり　浮世絵の画法は自ら土佐と異
なり一流獨立にして真の着色のごときは特別
の法と為す　頗る巧妙なるものあり　凡物形ありて
るなり　浮世絵は思想なくべからざる其
こと形色にして　何人なるか　懐月堂
其の人なり
懐月堂は是利氏の頃にして　数世を経の画工ふ
て世に懐月堂と称したるは　其の幾世の懐月堂
か盡き形色なるは　如何なる由なりしかを　要
元和のころ既に一流獨立の画法をなして風俗美
人画を画き出たりしこと即ち日本絵にして
世人称するところの浮世絵なり　かの又浮

てもすべて古し美川師宣流又は浮世
いへども其の美人画の骨法なり筆者又兵
法ふ似もして都て懐月堂ふ似ることなり
あるいは懐月堂の門人なるべき宮川長春の美人
画まと懐月堂なるべき得易らるべきこと
まく門人なるべき歟人フロノロ氏又この説を
吐して次きて奥村政信鳥居清信なとふ其の門
下ふ出てたることなるべき歟之なるべきこと
して此の徒の落款ふいまふ日本絵画日本絵師
大和絵師なと署して土佐ふ為ふ為ふ

一流獨立の日本絵即世人の称する浮世絵なる
こと明示ちて
こと浮世絵の画法屏と書ちとへと
もたず其の着色の法ふ用ちたる錦絵相付
へて今なと歌川家の末流ふ為ふて若俗漫録ふ
懐月堂を指して懐月堂内浮世絵のそしちといへ
るいまと一時の浮世絵ふ為ふ画の説と
なへて漫録の著者西村氏ハ世に古来ふ絵
師吉りとの事歟ふ明らかなるのみ為ふ
まく府内の事跡ふ通ちて日氏ハ風ふ浮世画の

祖ハ岩佐又右衛門ありしもして実ハ懐月堂ガ
ものなりと知るべし有間浮世絵のそしりをまぬかれ
ざるものなり　全寸　日光の西高をもとめ又
兵庫華の一幅をえらびしことあり其画一見土佐
画の真面目なりしてハ浮世絵ありうべきかハ
ものなりき
実一説ニ四季の絵の始ハ菱川師宣の意匠
基づくもの歟年白柏ガの世襲なりとおも
のづからつゝ浮世の人浮世又平とあぶ名
をえしゝ世ハ故ハとなすこと世人ハ又右衛
門

うて浮世画の祖ともする一説ニ云按ハ又右衛
門ガ歟年白柏ガの世襲なりとして之
をもて浮世画の祖とそハ那之延宝浮世画の
始ハ浮世ハ南世の意にして南世の風俗を画きし
ものと云ニ是又右衛門ガ始めるなり加の古土佐画
の所の絵素柏ガ宝の風俗ハ南村の風俗にして即浮世
画なり懐月堂の浮世絵ハ土佐の浮世絵と異
画法一様軸と出をるをもて自ら日本絵と称を
ゝ趣ハ世人一ハこれを浮世絵と称し日本
絵ハ浮世絵師の名称を附

まふ西王母さまれと手を重法ハ法師として四人如
一即日本法の名称始―て浮世絵と名なるなり
土佐の浮世絵と日一祖をへうしに法人こと
蓬をれ漫画又を描をを浮世絵の祖となし―為
して浮世絵の祖ハ清月重なることを知ふ事
ふ西王母曰

書先つ物をて西法ふ生を

鞠蘇西法ふ書西法を用ふをと去書先つ幽をて
西法ふ生を千紙ハ伏羲の時始て八卦を畫し―書
契と造て結縄の政ふ代と云へを孔安国尚書序ハ卦を
書の此をて八卦ハ畫ををいふ文王の横図
を畫をいふ法也ふをて法の名をし(用の
頃ハ畫図と云て図を畫ををいふる意なを荘子
ふ宋元君將畫図を云事こをなを法也直ふ図字
ふ作へ目也)御をふ古人を〳〵六書の中一を象形
を名つくるものハ法の祖なを那ふ西ハ書ふ先

たつ〻ものゝ考と矣せるなりて蒼頡ハ六書の
祖なりとそあり文字の祖ハ五帝の時代ハ黄
帝の時なりといへそ文字の蒼頡ハ先ちて物
ハ是〻〻ハ孔安國ノ說のゝなりし經傳とを
へきものあて毒〻きらゝハ予別ハ考あり

繪名目

福羅重讀ニ繪名目ハ初メハ國ヲいふて史皇氏
國家忠曰史皇黄帝臣圖謂畫物象ヲいふる云れ
なて是ハ〻〻ハ史皇ヲ蒼頡ヲ曰ふなて亜國ヲ
六書ヲ曰ふハ新ふへきものゝ例ハ墨亜ハ
五色ヲ施て繪ヲいふハ虞舜の時ヲ始なて
尚書益稷子張說古人之象日月星辰山龍華虫作
會宗彝藻火粉米黼黻絺繡以五采彰施於五色作
服汝明孔安國云會五采也以五采成此色ヲいふ
る之ハなて

鑒画法

名家書画譜小宋湯垢曰觀画之妙先觀氣韻次觀筆意骨法位置傳染然後形似此六法也今人看古跡先求形似次及傳染次及筆寔孫郎貴鑒之法也又元夏文彥曰看画之法不可一途而取古人命意立迹各有其道豈拘以所見繩律古人之意哉煙下不可看画辭餘酒迂方不可看画奏舒不得其法最落害物云云 濱生の人は画を觀る要法

畫圖

編纂史傳ハ畫圖ハ黄帝ノ時ヨリ作ルヿトハいへども
其ノ時代ノ畫様世ニ伝ハラヌヿ久キヿ遠キ藤
山人隠人ノ作ト伝ヘラルヿトハ作ノ最古キモノ
物トハいへども無ニ非ハ三代ノ画ト云ヘキ
得タルモ書籍ニ得ルヿロノ物ハ隠人ノ内筆
ニ出ルヿ所ノヿハ趙宋ノ陶鞏ナルヿハ
論ヲ待ヘシトハいへども三代ノ画ト云ヘキ得
ルハ森いまだ其ノ画様鐘鼎文飾ノ形ハ
ありし人物殿閣等ニテ隷体動モスルヿロノ

濃厚にして精しきこと無渝なる文あふれ出でたれい
古文を学ぶ如く質朴にして精霊なること奇
く妙なるものなること深淵勅編古玉図譜又
こゝに此書は三代に基ける玉器の所産なるべし
を写せるものにして総て百冊あり博古考古二図
み比して考校の学的用の書なり知るべし世間
こゝに伝ふる清朝にて翻刻せらるゝ後又
つゝに一部舶来して紅葉山の古籍ふかきより
こゝに市ゆづうふこゝを見ることを得て累年
の願をあつき矣見をいろいろこゝを嘗を但し

口好のくをしてうをさをあさを恨むのこ

書画會

右家書画法ハ遠世盛ニ行ハレ書画會ハ寛政
の比鐮倉の墨濱といふる侶ありて始まりと聞
侍へたれ共比侶向ハ必海ハ遊い清高程赤城ハ書
を学ひたりとて江戸ハ基て自筆の扁聯を製作
し又單帖ハ忙行日某の酒樓ハ於て書画の筵
を開き諸家の貴賓とまつと此一日を領先
四方ハ傳て高日諸客を酒樓ハ迎へ書と作
て画と作て楽を傾け高談ハ於て今ハ世日
多少の潤筆料と洋々たる山張書家半山も先

小倣ひて筆を代に筆墨盛に行はれ今は書画家
者流のごとくに儒流詞客も此定式に倣ひ書画
を作り詩賦書画の典雅にして古人の次を系竹
管絃をもてうたひ舞ふ筆毫の業をなして
山陰蘭亭の会もなほ一筆にいつへしさ
ほひ代の如き雅事後世庶幾かるべしんやと一
先生に問ふ先生云へり舎人書籍を又南
らねと僅に板橋詞飲よりつたて乾隆廿一年二
月三日平作一集會人口席各賛百銭以為永日
飲坐中三老人五少年白門程綿莊七園黄癭瓢与
燮板橋鄭
氏名燮為三老人丹徒李鄉麓邨王文治夏樓燕
京平文濤石卿金桷燕棕亭杭州張賓客仲謙
為五少年平後濟南朱文震青口又至遂為九人會
因画九畹蘭花以紀其盛云
按こ書画家ハ書家画家相兼して各作とあり又
まとかくを以代書古くそこあるされと其
盛なりしハ蓋文化文政の代なりしに元書画家
ハ古ハ風雅人の作にして俗塵と離れ一清
世なりしに後世の書画家ふあるにハ千石ハ風
雅なれとも其の実ハ書画の先生集家と名とし

て金円を集め其件の一部を以て方法を立て古蹟
しむへきことなり而して南畝の文人大抵書画会と称
さるる者なり其墓碑は寿逸追悼建碑なりと称
この名を冠して毎年これを住吉のあそこと
風雅中の悪弊といふべし

鑑定会

鑑定会は即書画の鑑定会なり会員古今の作
画を携へ来りて落款印章を如くして筆者の名
をあてしむるなり所謂氏曰く余ら又嘗て待聘
社塾中にありしとき毎月一回鑑定会あり又
は大抵鑑定をあやまりしとき此会
社規則は諸家所蔵の古画を蒐集し会席に陳ら
て其落款印章を如くして筆者の名をあてしむ
るなり会員各鑑定して投票をなし多きもの
は金を出すを法とし会員は凡二十餘

人もあるべしとて此一巻の會をもつて其の日は
會費を償ひ餘りありきと

書畫展覧會

名家書畫淡ふ梅ふ文衡山常ふ書畫と品評をる
うと体好む友人李日華衡山を訪ふこと〻ふ其花
そうる書畫を携へ示し大ふ悦ひやうて我蔵へ
たる所を見せんとて自書房ふ入りて四巻と出
し日華ふ示し終日いまる四巻をめへて出さし
如くそう支数遍倦むを知らずして歩まけるを
なるは陳ふて生世形下の文人閑居書畫考流
名古書畫と携へ或ハ禅流或ハ閑なる別業ふ集
て其幅を壁ふかけ毎日責玩し甲乙を品

評して歌を不ならしめんことを原親爺といへて実に風流韻事といつべし　余は一先生の同ふかめる韻の唐山にあるを先生に問へり

然るに諸比載或は注脚の末にも見へ前賢の書面と後の名士は親しく怡末尋尾等の姓名を紀し或は頭版と事にあるを以て孟浩也の優を重めたるに云へり

重姫

文晁重信ふ土佐守の家にて二月二日門人等て集て六曲の屏風を新に自作して移植松竹の絵を焼筆にて写し又そこに松にて次の者ありて各詩歌松竹の外にいつの頃にて作へ来りしかを知らと玉緑斎斗をめくらして竹の頃にて始ることを考へ探て得んことをのみ見るに探出は未の筆跡のみなりと

書画帖

名家書画該ふ書画帖は唐山よりいまだ多くは伝ることなし此篇もまた漫と称し一古人の遺墨を集め孫拔ぬきを財は此の部より新は部書より頒ち帖ふと製し之と書画帖と名ひ部書より頒ち帖ふと製し之と接へて四方に奔走して求むると雖も書画人の揮毫をもい工拙を選ばず只多く貪て得るをもて上計とし此の数ふ今の書画人其方ふたへをと用へしをも向ふ京師の人弘隆まい文仲といい又春荘と号し書をひさぐをもて業とし侍

を〻〻隱樣なる人なりと聞く天保年中京師
の大きなる名ありて大ふ落柏をうれと著莊帖と
名付る書畫帖を懷にして知己の諸名家ふみて
志るさしめ世帖いとう別莊なりて樂しみを
とりて時々時人持ちえへなりこれおい真子好
事なること又千風流なる物なり

收畫法

收畫法ハ後畫を收先為る順序をいふ鑒禪畫
適ニ逸世俗士の畫を好む雅士の畫を好むかと
教を異にして先亦各の癖ありて畫の高を賞玩
するこゝろ其教ハ道釈を後にして花卉山水黄
吳陳なりを豪玩されて畫を好むもの以上座
中人中鐵鋼珊瑚曰收畫之法道釈為上蓋古人用
工于此欲覽者生敬慕尊礼之意其次人物可為鑒
戒其次山水有無窮之趣其次花卉其次畫馬可以
図神駿若仕女書族宮粧妖非文房所可玩者此元

章之論也と又曰収画巻山水花竹窠石等作掛幅
文房舒軸者故実人物必須得横卷為佳とうけ一西
土の法なり然れども人名事物又編麻なり
こりとりて彼を法ゆへ〳〵に唯画家の所長を
もて愛玩をい新年ごとに都古来工手の大
景ハ金園宅廉可翁明兆の道釈信実相国土佐氏
狩野氏二河狩啓書能拙之雪舟宗且勝以具象松
花壺の人物光琳宗達光起の草花の如き数葉を
〳〵聖神とすべきものなり

裱装

名家書画読て大概幅ハ上引首とすみ〳〵て下引
首二寸なり中金幅ハ上引首二寸七分なりて下
引首一寸九分なり経帯ハ四分〳〵上標ハ撫を除
きて外浮一天六寸五分下標上軸を除きて外浮
七寸なりとなり これ唐山表具仕方の大概なり
国俗宝鑑の説なり又古画なり〳〵ハ直幅長さハ天
なりとも仮ハ横披ハ末帯又子なりて板なりなり学
者の説なり於茂立凡書画の性命ハ表具の無る
所なれハ最表具仕立ハ大切の事なり〳〵 照代

叢書ハ悉心高裝潢志ある唐山の仕立方に書ハ
ものを祝ものて千詳と称ふ

重裱具

重裱具ハ恰裱裝と異り如く裱裝地を重き掛幅と
なしたるものを以て其の始め詳らかならざるも蓋
友禅ちりめの創意なるべん否文晁業図是真なる時
にして祝ものこと地を雅味あるものあり
らし

落款

芥子園畫傳に元以前多不用款或隱之石隙恐書
不精有傷畫句耳至愧雲林字法遒逸或詩尾用跋
或題後系詩文衡山行款清整沈石田筆法潦落徐
文長詩河奇橫陳白陽類法精卓每愜畫位翻多寄
款近日俚鄙直習直學沒骨碑者是
安西氏曰〳〵古人畫を作て自己の名をそなへ標ふ
面中を淸そ〳〵〳〵。支言よ書ふべきかなて雲林の諸
老い畫面の善惡をそなへ日評〳〵佳句ふ落款と
〳〵こゝをと佛をて後世維ゝ至寶とせそ〳〵〳〵

千代に際まりて大雅堂三熊海京い落款にて見
事なり
按ふ我国の古画多くい落款なく又印章なく
こと画面を傷つくることを恐るるのゆへなるべし人ふ
對し謙遜の意を表するなるべきもい神併
の縁ありて言葉の画殿の画なりとなへて落
款印章あるもなるものの縁起物語の巻物の末
ゆへ落款をしるすものもあれとも僅にしるすを署し
書画面を傷つけを又謙遜の意を表するに足利氏
の頃にて印章を用ひしものの如しされ

ども其始ハ粉饉にて印章のみを押しるすに落ふ
ハ年月官位氏名称号なるべしと書き如へ画
面を傷つくるその多く神仏の古画ふ落款印章
なるもハ号称の意と云ふ所にて芸子園のいふ所
ども其意大ふ異なるあり

玉虚言

玉虚言はあてのまうすものと思くをかよ
古今著聞集ふあてのまうすの寸法ふ書てはそく
え所なきものふいかあ為ふ侍をふらうくはやう変
りてしは
禅僧玉侯ふ結ふ結をふらうくて国恵の事情ふ
遠ふと新をる者あり是ことを実のごとくして虚と常
いさとい新をなうくる好る玉くなを例へい柳
るふ牡丹と思くふ柳ふい大鋸なを大鋸の比較
とうて牡丹を思うい牡丹の花い梅花のごうき

大きなる墨にて如くなれば所なき
故に大器をもちて牡丹を墨にして獅子と
墨にして添意筆を高と解すれば南蘋の墨と
別なり大なる誤なりと云々

墨官

本朝墨史二令云中務省有墨工司正一人掌絵事彩
色（義解云墨之雜之類其染彩等雜色在太政官及
内蔵寮造其用度隔時支用事不在此司掌之也）
判官事録正判事準之佐一人令史一人墨師四人
墨部十六人使部十六人直丁一人又案左墨師相
宗恩拾芥抄曰墨所有別物（今按中世有墨所別準
古別為者乎）
五位蔵人預墨墨等有熟食本是内匠寮雜等也今
内堅按中世職員不立墨工司蓋以内匠寮兼墨所
職也凡内匠寮所統廣故源亜相親房職原歌曰内
匠寮掌工匠事但近代本工修理知其事頗似無其

鎧所

文藝類纂に類聚國史を引て天平勝寶六年正月壬寅勅曰云々其兵工漆部二司保内匠寮に出て延喜の頃は内匠寮として雲兵所を含まれしかども内匠或は修理職方三丈行事之前に日令に兵所鎧と為て内匠所屬の一司と設けたりと云ふ西宮記に兵所在式乾門内東脇に書所北有に別當五位或は六人顔色兵等云々内匠寮雜工也云々

群書類從に引て春日兵所あり住吉兵所あり

技藝畫人傳に墨光姓は藤原大織冠鎌足六世孫

流驅左大臣之男對南都東大寺に住し者
日と如て稱ずるを將て惠府領と為て內匠頭に任ず
本朝惠史に拾芥抄曰惠府（別惠士古名佐伯佐府）在建春門
內東腹御書所北按是大內裏之惠府也今以京城
國考之建春門皇居東面之中面之中門在壬生之
動解由小路也中也有任其官者而不知其府又有
春日惠府或曰南京宅間住吉民部芝四法眼等皆
為斯任多為佛像今京師惠工有稱惠府者專主圖
神佛惠法亦因旧其在昔時士大夫等之而天下諸
惠皆侯於此也　日書藤原隆能の傳に叙正五位
下任主殿頭勸修寺家庶流也中古以來所謂佐府
者自此時始乎

重佛師

重佛師ハ佛重をもて朝廷に仕へる者をいふ僧綱補任の佛師重佛師あり清和天皇の貞觀六年より僧綱位階を定めらる法橋ハ上人位法眼ハ和尚位法印ハ大和尚位なり從來僧師ハ僧所に於て一寺八介の官等をかき立位六位より叙せられ円顱方服の徒と異なる為に勅して重佛師より僧官と為りて之のい刀と等と異なるのみにて其業かの佛師と異ハ一なりとハなり

按ニ德川氏の時官の重師ハ必鑿を削て僧綱と

なるを例とすること蓋仏師として彫刻者なるものなり——古いまへて言葉の前に出るものは
こゝもと結構なり——仏陀を拵へたるものとえへて
て如反千年の事云類先ふ構意自法を引きて霊
元院の院中まて揚弓師正顕といふ者法称ふ叙
きられたることを載せたり

絵解

絵解は絵のこゝろを解くものをいふ縁進芸
覧ふ重ねき古点ときいふものあて三十二番
歌合ふ絵解（花の歌）ミところ中絵をもちゆる
花の御とめりとて我まふ——て判云（上略）
いかゝなんなる姿こと朱雀の尾のさしてと——
へそゝる絵解の新いいてら聞きむまる
述懐のゝ絵とうて比巴いきてふる我せと
そうもえそゝる先ゝなりうて判云平家は
入道の姿うて青目なり絵とゝいい結形ふ——て

雜妻う明とおもてうちも四條を年をて
ちうちふ條とかくて比丘ひくといひうきめく
えうう先うう〻いひて自他の所作とうく讀く
うけたうう〻ろ如うすの四方ちあて其の條
をううふ到間ふいうる如く法形うて比丘をい
たうき雜の尾とをうう柄のなづきうのを持ち第
うを出う〻たう條とその蓋のうちふ墨うて雜
の尾いさ〻數ものふ條のいうまきう為めと見
ゆ花柄夫神緣起の四うも條解ふうをこのと
ざ法ふい無邪比丘尼のまうう〻なうて赤海

道右所記いつの頃より比丘尼の伊勢無邪ふま
うち〻行をつ〻先〻ふ其外ふか伊勢無邪ふ
まいるこの故ふ無邪比丘尼ふ右付其の中ふ声
ふ〻歌をうう〻い市ふあうの あうて うう〻て動
進〻うを其外ふうを歌をうう〻ひうて まう無邪
の條と右つけて地獄極楽をうて六道のあて様
を條ふうまうて條うを〻うを要海〻松い〻ま
を女房達い幸ふまう〻て讀義ふとき〻ふとなけ
をい條也をうう〻ぬ人のううふ比丘尼い詳うれ
て佛法をも動ふ たてけうなていつの祖ふうと

なへくしなつて熊野伊勢などは考ふるも行くも
ちがひ方と後解をもあるべきことあるべきを後解
は後をさして其物語と比ぶるものをかの
なるは寺後世と動るものあるべし比丘尼後
よはものを弱をうらひ手指をとらるるとして
後は好者の方ふ流をうを
按ふ地獄極楽の図をのぞき如くをみして後
解きをなしたるものは赤水のうるまて二ヨ去
をしう後よは源平合戦西南戦争あるとかりくて
みし妙な声如をたてうをるものあるを且即

ち重解きの残るなるべし

法然坊

著聞集ふ後白河院の時法然坊といふ者ありけ
ていうふよりて書たる法もあれを弟子と見いつらを
そのなかに中り郎世ばかり上人の書たる法
本のなかふ人の方を引たるふそをひてのうし
とをそこる都まことふいきてそこをいたりそ
又男のかくあるまてたつき始をうけて大師を
きうたる方て法皇の仰ふこうをい法然坊も力
おはそ〳〵そのをうて即そ〳〵てそをれられい
よく〳〵又て思て〳〵い書てはら弟子とはこ

まかりそうじたる大の貫使ハ寺々の下く
てよりて引きこきまてなくきなりことハ大いを
ゆひて倶舎通なる鮮ふるへハなり又大ハきて
なる男をてくしハ但らゆるの大ハをなるら
ゆき如のとりふ兵今ちてるらけりをうまふ
て前ふ散つりをなるあしこと大なる駝ふゆと
ゆけ見ハ法皇仏ちゆうこうなく絵をわさ
をくふをなる

でさ〳〵重

理角法華ふむ〳〵京童の袴ふ形ハの爪ふ過き
たるうの七ツをと弗七婆娑羅世のでさうしい
つるうの文選の注解ハ婆娑ハ放逸の白をあ
て又古年ハこでうの凡とゆへるあて又でさう
ゆかとちて其意ちをうく〳〵くをてことを
菽所ふ問ゆしめ寺ふ答ふハ潛日羅ハ本義
金剛ゆゆふ梵語あて金剛ハ眼を聴ゆ〳〵ハそる
しき形容をて人の目をゆうハ衣裳をるて
うと婆娑羅ハゆ〳〵なをと十鈴〳〵ゆ志ゆう

ハ北政侍羅とうきさうくよりきうしまや
寺年紀巻十九将軍上洛の条ふされハ其のころ吳
佛景社の御を向方廟ちいのぞきう絵もう河保
秋山う河糸軍ちてかくもぬくもかくもかく和河
聖ふ廟ちちかの[illegible]絵も年記 板折重と書て今
も粗廟とぞさくくといへて將遊笑覽ふちへて
来蕃の日行ちる遊ひふ似ちとバサラといふ
又バサラ猿樂ちへて浮世重考 浅香英二 方
法重文の頃法沙羅重とちもの あちくくて書ふ
雖遊笑覽と同ちへ書い廟ちいのぞきう
土佐ぶくくとちて行ちへ

絵ちも是と云くて書ぬハかうそくと行るい其
のに流りのこうに重き板行みくて墨ちうてふ
て行ちあちあて彩色ちうて粗相みくたちなる
くくふ 元和寛永のに バサラとハふもあふ
ちもの業ともちもいい男達と学ひきちいい組ちて市
中ちちいい遊山のきの たけちもるものとハふ
方言ちを業ちる重法ちも 拘ちに達者ふて
う行きちうて廟国廟の仕入物と同ちへ国と
巧ちきちひ重きて業ちちちを バサラといふ流
ふ法くくてそけくるて南蛮い一うとの重師を等

と重〳〵なりぬ 波羅は玉なり 衛重と
て重位と書るに 絵図奈良の 燈籠又世物芸者の
看板を遊興提灯の影なと重て書るものなり云
く 妹遊笑覧ふバサラ風といふも手紙のもやを
ちらして 妹乗物をの 羽なとうるはして 安安の義よ
て 接藉なりと つまり 五骨の扇い 中骨うやう 末
廣りて たとへはぐるといふ 絵なもちてえぶれ
たるやうの事と 絵ふぐるけるとこなり云く

下重

源氏物語 若菜上 住吉の 住吉 住吉 四時 月 住
吉 住吉 のうちぶんみ志
た絵の 三月なと おろなん中 ハ 初 ー ろき
春秋の つくも点 ろ こ の 住吉 の そ
つきの 四〳〵 きぬ ハ 名 ハ おろ 秋 ろ
さへ 名 て さ 〳〵 ろ ん ち て ろ 武 物 ま ち た ん ハ
と ひ き た ち て 上 ふ 住 筆 て 下 絵
ち と ひ き ち ち 〳〵 ち て
宋 花 物 絵 今 室 桜 供 居 の 絵 色 紙 の 住 絵 ち ち 名
ひ 〳〵 せ ち 〳〵 て い ひ ち 〳〵 の 高 ふ 絵 の ち ち の 心 て

〻とゝ分うゝ也 作へて

重本

重本い重ゝ本といゝ又軍記ゝ小説の挿重
ある冊子をゝいゝ文部ゝて重ゝいゝハ稿本
即下重のゝとなゝ葛原詩話ゝ上巻又重ゝと
いゝゝとゝ也あてゝとゝ重師ゝ山水春島ゝと尋
て重の特徴をたゝるゝとゝ元の劉孝吉ゝ徽
宗人馬図の詩ゝ汴梁門外如雲屯重本相見意自
責金党懐英ゝ溪村詩話図の詩ゝ江村清境皆重
本重裏更侍詩法工

粉本

粉本ハ古人の画稿をいフ図画宝鑑ニ古人の画
稿ニ基キ粉本ヲ作ルと雲ふ[illegible]これ
を蓄ヘ蓋シ其の写シ[illegible]て経ル年月
数の久しきを云フ

禅餘画徒（越後の人ナリ林月峯著）ハ墨本を粉本ヲいフも石画
を墨をうつしあらうて過ちて墨汁を本紙ニ注ぎ
い趙璧ハ紙を生ぎ[illegible]なりて故ニ膠水胡粉を注き
き[illegible]ハ粉を和シ粘着の乱ルるも紙背ニ透徹
せざるを要ス故ニ[illegible]を粉本ヲいフと

梅ふ小林氏の説一形為ふ似て見ても胡粉を
為ふ和一こと塗抹ふもの工夫ハ多くしてれ
ど本紙の上ふ如き透写しふ方ハ古類なるべ

画題

画題を撰ぶハ画工の最緊しとする所なり仮令ハ絵支
部ふ南宗の画ハ古雅なる山水を写すも
皆題ありて輝華の間自分を狂ハしむるの余
事とせて蘭竹梅菊を写すハいとへとして其の
清操を君子ふ比せる方ふ蘭の侍ふ草を画く
ハ蘭ハ王者の香今庭中と植て方ふの意なり竹
ハ水石ふ従ふ清澗の詩ふ曰ハ潤水瀟湘の流
なりとまた比類ふ前輩をそんするハ君子の側ふ
侍人ありの如き意なりて其の池梅と曰ふて孤山の

幽趣を想見し蜀を思ひて叢里の遠情を延懐し
又日觀の蜀葵子固の水仙の類は其の清清を
敬ふなり　又曹霸韓幹韓滉子昂の徒の馬を描き
しは哀馬をして君子に比するの意なりも為よ
其形神駿の額を要とし其美人を重くは
関雎の篇に拘らずして其の容貌は莊
を学ぶに中君澤擇端は清明上河の図と造りて南
宋の中主を諫め鄭所南は露根の蘭を画りて懐
慨の志を表し李朝の五佛の仰ぐ亡身に始せの
奏を画りて其文に寄せ島田の覺敵の奇
怪のものを画くて其の志は古人世を風諫するに
て一毋の親作に為るに云へ

重才

往年鄙言ふ家の徽宗の朝五岳觀と建て大小天下の名士を集む此時詩句を以て題せしめ其意を重うしめ諸子の才を試うるに青野水無人渡孤舟千日横の句を以て題せしに諸子の中に室紅を岸に繫き武陵の桃の蓬背に樓むりしの図様をこと告げ二樓にて其才一樓に撰ぶ時の妙を家子房の作なりて千図に一立人形屋に部して横笛を吹く雅なりて高い舟人紅日こうこうとあるこうこう荒野寂寞其往のくるる跡

と云へ出ることなく又外山花吉寺といふ白とも
て類ときへふ京子房ら造る所い清幽ふ素山と
似て林間にて一の幽筆を出すとなるなること京
寸一樹にて他人の要へ所い皆山間にて佳景を
出すもの類ふ過きられい一見して感意あること
と云へむ形ふ類ふ造りきりと

六法

荀子園亜學淺設ふ南齊謝赫曰氣韻生動曰骨法
用筆曰應物寫形曰隨類傳彩曰經營位置曰傳模
移寫骨法以下五端可學而成氣韻必在生知
格と土佐狩野の亜法本世の六法の外ふ出つる
こと云へきれい狩野流の亜工龍雲の林守篤音
亜筌數卷を著いて奉ふ六法を挙けて細ふ
其義を解きぬるもの

六要六長

芥子園畫學淺說 宋劉道醇曰氣運兼力一要也格制俱老二要也畫異合理三要也彩繪有澤四要也去未自然五要也師學捨短六要也麤鹵求筆一長也辯淡求才二長也細巧求力三長也莊惟求理四長也無量求深五長也平重求長六長也

十二忌

莽子園亟學淳說。宋饒自然曰一忌布置拍密二遠近不分三山無氣脉四水無源流五無曇濺六路無出入七石只一面八樹少四枝九人物倚傍十樓閣錯雜十一漏淡失宜十二點深無法

三品

荊子圖畫學淺說云夏文彥曰氣運生動出於天成人莫窺其巧者謂之神品筆墨超絕傳深得宜意振有餘者謂之妙品得其形似而不失規矩者謂之能品

三病

芥子園畫學淺說ニ宋郭若虛曰三病皆係用筆一曰板々則脆弱筆痴全虧取與狀物不能円渾二曰刻々則運筆中疑心手相戾向畫之際妄生圭角三曰結々則欲行不行書散不散似物滯礙不能流暢